

世界は狭い。

手の平の上にある情報端末から世界のどこで誰が何をしたかだとか、誰かが不適切な発言をしただとか、どこでどんな事故が起きたとか、毎日毎日私の手の平の上の世界では様々なニュースが流れ込んでくる。

私は朝食を用意するまでの間、通勤中、ちょっとした休み時間に手の平の中に広がる世界から情報を引き出し、報を引き出し、確認し、次へまた手の平の上の世界の中で起きた出来事を咀嚼していく、甘い味のものも苦い味のものも満遍なく。

情報はいくら摂取しても腹が膨れることはないし、ニュースで知ることが出来る内容のデータはそこまで多くはない。だからより詳細な情報を求めようと、SNSでは様々な憶測や噂が毎日伝播していた。

まるで平穏な日常に飢えているかのように皆情報の咀嚼を繰り返す、手の平の奥で起きた非日常の実態を見て咀嚼する。

私もその一人で、ニュースで報じられるような事件とは程遠い存在だと思っていた。自分は関係ない、あくまで私が住んでいる世界とは別の場所での出来事なんだと。

しかし、それは何の予告もなくある日突然訪れた。

ヒト一人分がようやく収まりそうなブルーシートから赤黒い液体が漏れ出していた。周囲には立ち入り禁止を示す黄色いテープが張られ、カメラのフラッシュがけたたましく鳴っていた。

青いつなぎを着た捜査官達がブルーシートを手際よく丸めて持ち上げると、ブルーシートは人体の大きさに大きく歪みどこかへ運び出された。私はその様子を黄色いテープの内側から黙って見送っていた。

かつて死んでいた男が居た場所は、漏れ出た血痕の残滓がその場の空気をじめじめとした重苦しいものへと変貌させている。そしてその側には一体のアンドロイドが座り込んでいた。

後頭部に何か焦げたような跡があり、血の匂いに混じって焦げ臭いような匂いが辺りに充満している。

誰かの手によるものなのか、自ら行った行動の末なのか分からなかったが、電腦の一部をショートさせられておりそのアンドロイドは既に動かない。

そして、その手元には被害者のものだと思われる血痕が付着していた。

「それで、あなたが害者の第一発見者だと伺いましたが。マルコムさん」

その場に漂う重苦しい空気の感傷に浸る暇も無のまま、白髪混じりの中年男性が私のもとへ駆け寄ってくる。制服を着た捜査官や検察とは違い、黒い合皮のロングコートに身を包み、慣れた様子で現場を闊歩している。

その姿から、彼はおそらく刑事であるだろうということをお互いに伺わせた。

「はい、ただ前にも申し上げた通り私がこの場に駆けつけた頃には既にこの有様でしたよ。アンドロイドがうちの職員をどうという訳か殺して、自ら電腦の回路を焼き切って自壊した。私はその現場を偶然見ただけに過ぎない」

「別にあなたが犯人だと疑っている訳ではないですよ、状況を見る限りホシはもうはつきりしてますからね。まあ形式上のちほど事情聴取はしなければなりませんね」

私は溜息を付いた。私がこの場に足を踏み入れた時には既に目の前の状況で時が止まっていた。だからこの状況は自分が犯したものではないという事を自分は知っているが目の前の刑事にとっては被疑者の一人という事実に変わりはない。

犯人は目の前にいるアンドロイドで間違い無いと思われるが、おおかた遠隔操作による他殺の線を検討しているのだろうと思った。

電腦を取り出してログを探ればこのアンドロイドの行動を追えるが、目の前で停止しているアンドロイド義体はどういう訳か自らの電腦をショートさせているのでデータがどこまで生きているかわからない。

あとは関節がどのような動きをしていたか、各器官の動作を解析する線しか残っていない。やることは山積みだった。

「アンドロイドが、それに出荷される以前の実験用の個体が人間を殺すなんて事例はこれまで遭遇した事ありませんでしたからね。私はこの手のモノはあまり詳しくはないのですが、何者かによって遠隔操作されていたなんて事は無いんでしょうかね？」

刑事から質問が飛んでくるが、ある意味見当違いでもある質問だった。やれやれ仕方ないと思いつながら私は刑事の質問を否定した。

「それはありませんよ、外部からの不正アクセスを許してしまえば我が社の信用は失墜してしまう。電腦というパッケージに収められたシステムは防壁によって護られる。ウチの社内の人間だって商品の遠隔操作を行うのには許可がいるし、ましてや私的な目的で遠隔操作をしたいだなんてまず認められない」

「しかし、普通は考えられんでしょう。アンドロイドが誰の人の手を介さずに人を殺すだなんて、車庫に置いてあるクルマが勝手に動き出して持ち主を轢いたってくらい話が飛躍している」

「だからこちらも困っているんですよ、コイツがどういう訳か自壊してしまったせいで行動ログも洗い出せない。電腦をショートさせてなければOSを立ち上げて楽に解析も出来る筈なんですがね」

私はそう言いながら壊れてしまったアンドロイドの義体をチェックする。義体に触る前に刑事に目線を合わせて触ってもいいかどうかの確認を取ったが、刑事の男は渋い表情をしながらも頷いた。後頭部を触るとまだほんのりと温かく何か焦げたような匂いがより鮮明になった。どういう訳か意図的に義体内部で高電圧を発生させて電腦内の各機器をショートさせているようだった。まるでUSBキラーを差したコンピュータのように、高圧電流によって内部のコンデンサーやCPUが焼け焦げているのであろうという事を伺わせる。

そしてアンドロイドの身体には至るところに傷跡のような凹みが確認された。殺された男が抵抗した跡なのであろうか、顔や胸部の至るところに強い力を加えたような跡がある。

それを確認した私は、警察の鑑識で調査を行っても無駄だろうということを悟り、刑事に訊ねた。

「本来ならお宅の鑑識に回すのが妥当なんでしょうけど、何分被疑者がアンドロイドですからウチのラボで解析を行っても？」

「ええ、いいですよ。少々面倒だと思いますけれどもその前に事情聴取を行っても？」

「構いませんよ、私から出る事はもう何もないと思いますけど」

私は刑事に言われるがまま別室に移り事情聴取を行ったが。あまり濃く疑われていなかったのか刑事ドラマで見る恫喝やライトスタンドの光を直に浴びる事は無く、形式的な質問に回答するだけでその場を解放された。

これも一つの体験だと思いつし野次馬根性のような関心が湧いていたが、あまりにも簡素な形で終わってしまった為拍子抜けしてしまったという印象だった。

その日は社内で発生した事故の影響か事情聴取が終わると退勤を促された。

アンドロイド製造を行う我が社アルカナにとって初めての事故であった為、社にいる人間達は動揺を隠せないような雰囲気満ちていた。

案の定ではあったが、社内で利用される業務チャット内では噂話や何が原因だったのかという話で持ち切りだった。

私はというと正直な所疲れ切っていた。

誰かが死んでいるところを目撃するなんてことは日常の中にそうそう無い事だ。

SNS上で誤ってグロテスクな画像を見ってしまうなんて経験はしていたが、実体験として誰かの死を目撃してしまったのだ。

殺された男がどのようなかたちで殺されていたのかなんて正直思い出したくもなかった。だが脳裏に焼き付いた光景がたびたび蘇ってくる。

殺される前は私達と同じように当たり前のよう生きていた筈なのに、身体のある部分が欠損して命が失われるとただのモノになる。

人間の遺体は一定期間内に葬儀を行わなくてはならず、火葬や埋葬、生物分解葬といった手順を

踏まなければならない。

故意に長期間所有する事は死体遺棄や傷害にあたる為遺体の尊厳はモノと同じと言い切れないが、命を失えばモノのように動かず何らかの事象に反応する事もない。

命というモノの在り処がどこにあるのかも分からない現代において、あると無いとではここまで違うのだということが実感として私の身体にはつきり刻まれた。いずれ自分もあなるといふ事実がこれまで心の奥底に仕舞い込んできた冥い感情を呼び起こすと、知らずの内に私の足は強く震えていた。

「考えすぎだ……帰って寝よう」

この事件がアルカナ社内起こったという事だけが唯一幸いな事だった、もし既に市場に出回っているアンドロイドがこのような問題を起こしたら我が社の信頼はあっという間に失墜してしまうだろう。

自分自身が技術者である以上転職をする事もできるが、問題が明るみになってからは同業への転職は枕詞にあの問題の……と添えられてしまうだろう。

そうなってしまえば業界内で食いつぶぐれてしまう未来だってあり得る、その事は考えたくなかった。

嫌な想像をしてしまってぞっとしてしまった為、急いでPCをシャットダウンし、私は手短かに出勤の準備へとかかった。

今日見たことや浮かび上がってくる懸念を振り払うかのように帰宅し、酒を煽って曖昧なまま眠りについた。

次の日、起床し目覚ましを見ると出社予定時刻を大きく過ぎていた。

前日に酒を煽ったせいも、多少気だるい身体を引きずりながらシャワーを浴び、朝食を食べないまま身支度をしてそのまま会社へ向かう。

会社への道のりはクルマを使用する。スマートキーでドアを解錠し目的地までの座標を入力すれば、あとは自動運転で連れて行ってくれるという便利な代物だ。しかし、不測の事態に備えて人間がクルマをコントロール出来るように常にハンドルを握っていなければならない。

だが、それも形式的なもので大抵のドライバーはバスや電車に乗っている時と同じようによそ見をしたりスマートフォンに表示される情報を見ている。

念の為という形でスマートフォン情報の情報をフロントガラスの一部に投影させて、出社に至るまでの間ながら運転をするという訳だ。

フロントガラスに投影されたニュースはいつもと変わらない様子で次々と情報を出している。昨日我が社で起きた事が既に報道されていないだろうかという不安から、アルカナ社についてのトピックを意識的に探し回っていたが、出てくるトピックは株式の情報や近頃リリースされた新しいOSの機能について解説する記事しか見当たらない。事件についてはまだ何も報道されている様子は無かった。

その様子を見て私はほっと胸を撫で下ろした。出社するやいなや報道陣に囲まれて質問攻めにされる事など想像もしたくなかったからだ。

いつも当たり前前事であるかのように見ていた情報の姿は少しだけ違った姿で見えていた。詳細なディテールこそ語られないものの流れてくるトピックのひとつひとつの裏側には見えない情報が内包されている。

我が社で起きたこともいずれば……そう考えると身震いがする思いだった。

「おはようございます、朝食はどうなさいますか？」

会社につき、セキュリティゲートをくぐるとテーブルの上に様々な具材が挟まれたサンドイッチが陳列されていた。私ที่บ้านで朝食を摂らない理由がこれである。

会社の負担で社員に健康的な食事を摂ってもらおうと朝食をはじめとしたサービスが提供されている。社員であれば無料で利用出来る他味もそれなりにおいしいし、何より自分で食事を用意する手間を省いてくれるという点が気に入っていた。

「やあ、ジェニファー。いつものやつある？」

私は陳列されていたサンドイッチの奥側に構えていた女性型アンドロイドに話かける。ジェニファーと呼ばれた彼女はこうした社員達の食事を提供する為に用意されたアンドロイドだったが、朝出勤して彼女と軽い会話をする事は日課になっている。

「おはようございますマルコムさん。残念ですがいつものベーコンサンドは既に……」

「仕方がないよ、私が遅刻してしまったからね。じゃあ、このエビとアボカドのやつを貰える？」

「畏まりました」

形式的な他愛のない話ではあったが、私はなんとなく彼女と話をする時間が好きだった。エンジニアで不規則な暮らしをせざるを得ないことも多く、人間的な暮らしをする事は贅沢な事のように思っていた時、この朝食のサービスが出来た。

質の良い食事を会話しながら選べるということは、少しでも人間的なように思えた。

ジェニファーと話が弾むということは無かったが、このなんとなく豊かな時間の中に居る彼女のことを、私は気に入っていた。

「ところで、今日はラボから呼び出しがあるそうですよ。何があったかは分かりませんが、警察の方も同伴されているみたいで……」

ジェニファーから切り出された話題に私は肩を落とした。昨日の出来事が地続きで続いているような感覚が蘇ってきたからだ。可能性は低いとはいえ私は昨日の事件の第一発見者という立場であった為、嫌疑をかけられている状態だ。

今日はその事件を起こしたアンドロイドの解析結果を見ながら捜査に協力して欲しいという事なのである。

「わざわざありがとう、すぐに行くかと伝えてくれないか？」

「かしこまりました」

私はジェニファーにラボへの連絡を頼むと受け取ったサンドイッチを口の中に詰め込むようにして早足でラボに向かった。

せっかくのサンドイッチなのに、今日は砂を噛んでいるような気がした。

ラボの中に入ると冷えた空気に体中の皮膚が収縮するような感覚を覚えた。

我が社のラボは経年劣化や品質基準に満たないアンドロイド筐体が運ばれ、義体を解体・解析を行っている。

データをまとめるラボはシステム開発を行う棟とは別であり、ラボ一棟丸々巨大な倉庫のような形になっている。

ラボの中は病院のように壁も天井もすべてが白く、その中に大量のアンドロイドの義体パーツが吊るされている。

遮光用のオレنجがかかった透明のシートに覆われた義体は、まるでクリーニング屋の倉庫のようだとここに来るたびに感じる。

アンドロイドのパーツが収められている場所を除き、壁も天井もデスクも職員の制服に至るまで全てが白い空間であった。

そこに明らかにその場に似つかわない黒いロングコートを着た白髪混じりの中年男性が職員の人を質問攻めにしていて、近寄ると昨日会った刑事である事がわかった。

刑事の髪は若干皮脂のツヤが目立ち、額にも同じようなものが見られ、着ていた洋服はシワが目立ちよれていた。

その付近には、昨日現場に居たアンドロイドが白く固いベッドの上で横たえられ、様々な器具で解析をされていた、解析の様子はモニターの至る所に表示されていた。

「ああ、マルコムさん来ましたか。さっき解析の一部の結果が出た所ですよ」

「……遅れてすみません、思った以上に疲れていたみたいで寝坊してしまいました」

「この手の捜査はそうそう受けるようなもんじゃない、仕方ないですよ」

そう話す刑事の声にも、やはり疲れの色が濃い。

「それはどうも、それよりあなたは徹夜でこの捜査を……？」

「職業柄というやつですな、仕方がないですよ」

「雑談はそこまでにして頂けます？」

シャープで低い女性の声私達の間突如入り、私と刑事の視線はその女性の方向へ向いた。その場にはデスクに座り白衣を着た研究員の女性が居た。三代そこそこと思われる研究員の女性はこちらに視線を向けず、モニターに表示されたログをじっと見つめている。耳元や額すら隠れない程短く切り揃えられた黒い髪に白い肌。年齢の割にはきめ細やかな肌が印象的だ。

「自殺したこのモデル、顔面の前頭筋、上唇鼻翼拳筋、小頬骨筋、笑筋、口角下制筋の劣化が著しく加えて胸部や腹部股関節部に至っては触覚センサーの破損が見られている。それに骨盤と大腿骨には歪みが出ている」

白衣の女性は私達の沈黙も意に介さず、自分の話を続けた。

「……で、このアンドロイドモデルの行動記録は？」

「破損したいずれのパーツも一度使用したくらいでは劣化が起こるものではない、出荷前の耐荷重・衝撃試験でさえもここまでの損傷は起こらない。このモデルは日常的に暴行を加えられていた形跡がある」

「そうじゃない、このモデルが被害者の男を殺したかどうかについての所見を聞きたいんだ。電腦内のログは？」

「いずれも自壊時による過電圧でショートしていた、データを取り出すのは物理的に不可能……被害者による日常的な暴行に対して自身の存在を維持しようとした、というのが妥当な線だけれど」

淡々と述べる女性に私は苛立ちを覚えてしまい、声を荒げて言った。

「推測が欲しい訳じゃない、こっちは確証が欲しいんだ」

「いいや、ちょっと待ってくれ」

未だ被験者として疑われている身であった為、自分がやっていないという確証が欲しかった。その苛立ちを隠せないでいた私に対して突如、刑事からの割り込みが入った。

「昨日の聞き込みで被害者の男性、ブレットは個人的な理由で倉庫や会議室を私的に利用していたという証言もある。また暴力的な側面も度々目撃されていたらしい。昨晩の司法解剖での死因は首の骨を折られた事による頸椎損傷だと思われていたが、どうも不可解な点があつてな……」

「不可解？」

「ブレットの下半身の一部が引きちぎられていた、わざわざ被害者が死亡した後にな」

刑事の言葉を聞いた途端私は吐き気を覚えた。

「……あまり言いたくはない事だけれど、被害者のブレットはアンドロイドに暴行を日常的に行っ

ていた。その末に抵抗されて死亡した、そういう事でしょね。表情筋の損傷が激しいのも暴行を加えられた末に苦悶の表情を浮かべていたとして示しがつく」

「……今まで疑って悪かったな」

刑事が私の肩を叩くと今まで抱えてきた心の重荷が少しだけ晴れたような気がして、溜息と共に少しだけ脱力した。しかしラボの中で告げられた事実は私の中に暗い何かを残した。

一息つく暇も無いまま刑事から研究員の女性に質問が飛んだ。

「アンドロイドが事故を起こすといった事例を取り扱った事は今まであるんですか？」

「いいえ、いずれのケースも所有者による過失で故障という事例が主で、アンドロイドが自発的に事故を起こすというケースはこれまで無かった。マルコムさんでしたっけ？最近電腦内のOSのメジャーアップデートがあったそうだけど、このモデルにも当該のOSが？」

「ええ、dtOS……Deep Think Operating System、数ヶ月前から出荷されているアンドロイドにはすべてdtOSが搭載されています。dtOSには確かにアンドロイドにより人間らしく動作を行う為に、自立思考能力と表情機能の大幅な改善は行われていますが……それでも倫理コード第六条によって人間に危害を加える命令は停止される筈だ」

「しかし故意にウイルスを入れられた形跡も無い、ハードウェアにも異常が認められない今OS内部を調査する必要がある、OSの開発署の担当者は？」

「確かラザムという名前だったような……」

「彼は今どこに？」

「ベンサレム計画で大西洋沖の海底に常駐している筈だ、だが数ヶ月前から連絡が取れない」

溜息と共に長い沈黙がラボに訪れた、手がかりを持つ人物の所在を掴みかけたと思ったら果てしなく遠い場所に居て、しかもコンタクトを取ろうにも現在ラザムとの通信は何故か途絶えている。

それにdtOS自体に仮に欠陥があるとしても、その確かな証拠を提示しない限り製造ラインを停止させたり、OSのダウングレード対応を持ちかける交渉も困難になってしまう。自分自身が被疑者であるという線は消えたが、果てしなく長い徒労、それに業務とは関係の無い事がこの先に待ち構えている事を思うと私は肩を落とさざるを得なかった。

「ぶしつけない質問ですが、このアンドロイドが被害者であるブレッドを殺害した件はどのような扱いになるのです？」

私は気力を奮い立たせ刑事にそう質問する。

「現代にアンドロイドを法で裁く手段は存在しない、例えOSに欠陥があったとしても被害者にも過失があると認められた以上遺族による告訴も無いでしょう……事故死という扱いになるでしょうな。事故を起こしたアンドロイドは破壊処理、歯がゆいでしょうがこれで決着という所でしょう」

「アンドロイドが所有物である以上彼らを守る権利も存在しない。故に人間の普段隠されていた暴力性があらわになりやすい。物言わぬ彼らであれば傷つけても平気だとね……ここに運ばれてくるモデルはそういった事例が殆ど。仮にOS自体に欠陥があるのだとしたら、ラザムって男はこの事態に警鐘を鳴らしたかった……のかもね」

女性は持論を展開すると、ラボの中に長い沈黙が訪れた。

「とにかくdtOSに欠陥があるかどうか、調査してみない事には始まらない。もしOSのプログラムの異常があるとしたら、既に出荷されているアンドロイドにも同様の事故を起こす可能性が無いとも言えない……お願いできますか、マルコムさん」

気は進まないが私は答える。

「分かりました」

「それと……この事はくれぐれも内密にお願いしますよ。今はどこでも発信出来てしまう、情報がリークされる事でこっちの捜査が攪乱されてしまう事もあるんでね」

「大丈夫ですよ、HOSはウチの目玉製品なんですから。コンプライアンスの教育だってしっかり受けてきている」

「そうか……それじゃ頼みましたよ」

ラボを去る私の胸の中には煮え切らないものがべっとりと付着していた。本来は自分自身の疑いが晴れた事で安心して良いのだろうが、事件の詳細なディテールを覗き見てみると何とも胸糞の悪い内容であった事に辟易とした。

被害者であった筈のブレッドがアンドロイドに日常的な、それに性的な交渉まで含めた暴力行為を行っていたなんてとてもじゃないが同情はし難い。人間が相手ならすぐさま暴行罪で検挙されてしまうようなことも、アンドロイドが、モノが相手なら問題は無いという事になる。

逆に、今回ブレッドを殺したアンドロイドはブレッドを殺した後にどうして自らの電腦をショートさせたのか。それも疑問だった。暴力に対し自己を防衛するならまだしも、抵抗しブレッドを殺害した挙句自ら死を選んだ。

私はその行動がある種人間的な行動だと思った、アンドロイドとブレッドとの間に歪んではいても何か密接な関係があったのではないか。それともアンドロイド自身がブレッドを殺害した後に自分に降りかかる運命を分かっている、その末に自殺という道を選んだのか。

真相は闇の中だが、自殺したアンドロイドの中身には確かに何かがあるのかもしれないと、この時私は確信に近いものを得た。

「もう昼か、メシにしよう」

時計を見ると既に時刻は昼過ぎを示していた。ラボを出ると青い空に積乱雲ががり陽の光は夏の暑さを帯びていた。残暑はまだ続くだろう。腹が減っているはこの暑さは流石に身体に堪えてしまう。

昼食は何にしようか、そのようなことを考えながら私はラボを後にした。

「マルコムさん、お疲れ様です。随分疲れた様子ですね、食事は摂られましたか？」

オフィスに戻ると出社した際に出会ったジェニファーと会った。彼女は既に終わったランチの片付けをしていたようだった。

「ああジェニファー、ランチはまだだよ。何かある？」

「既にランチタイムは終了してしまったので本来なら何もお渡しすることは出来ないのですが……」

ジェニファーはそう言うのと厨房の方へ急ぎ足で駆け出していった。私はやはりそうかと落胆しながらしばらくじっと待っていると、手に何かの包みを持ったジェニファーがこちらへ走って来た。

「おまたせしてしまって申し訳ございません。これ、余り物ではあるのですが……」

ジェニファーから包みを渡されると温かい感触と肉の香りが鼻腔を突いたので、急ぐように包みの中を確認すると、中にはタコスが入っていた。

「ありがとう……助かるよ」

私は渡されたタコスを頬張ると、ソースの甘い味とスパイスの香りがたちまち口の中に広がった。午前中から慣れない捜査につきあわされて疲弊した身体には丁度いい味だった。

「あの……これからどちらへ？」

「ああ、研究棟だよ。ようやく職場復帰……と言いたいところだけど、事件の捜査も並行してやらなきゃならぬだろうな……」

「どうか、無理はなさらないでください。身体を壊されてしまうとあなたの分の食事、作れませんから」

嬉しい一言だった、アンドロイドとはいえ誰かに心配されるのは。

昨日の今日ではあったが、人が死んでいる現場に立ち会って二日にも渡って捜査を続けられた、とてもじゃないが慣れることはできない。加えて先程まで被疑者として扱われ、自分が逮捕されてしまう可能性だってあったのだから、憔悴していた。

そんな枯れ果てた状態の中でのジェニファアの一言で、身体の中から活力がみなぎってくるようなそんな感覚が出てきた。

「ありがとう、もうひと踏ん張りさ。明日もまたよろしく頼むよ」

私はジェニファアが用意してくれたタコスを頬張りながら研究棟へ向かっていく。食べ慣れた筈のタコスの味が今日はやけに美味しく感じた。

研究棟に到着すると、むき出しの鉄骨がひしめく薄暗く広い部屋に、慣れた匂いが鼻をついた。徹夜好きの技術者達が発する匂いは、消臭剤でごまかした運動部の居室のような独特な匂いだ。

嗅ぎ慣れていたが、あまり好ましくない匂いである事に変わりはない。除菌用のアルコールティッシュは簡易洗顔の為すぐに無くなり、ゴミも散乱しやすい。お世辞にも衛生的な環境とは言えないような場であった。

だが、私生活を嬉々として犠牲にするそんな彼等の絶え間ない情熱のお陰で、我が社のアンドロイド製造事業を網羅出来ていたし、社内における政治からも縁遠いある種自由な場でもあった。手放しに好きとは言えないが、ある意味愛おしいと思える場所。それがこの研究棟だ。

鉄骨と生活用品が入り乱れるオフィスの中を練り歩き、ある一つのデスクにたどり着いた、箸やティッシュが乱雑に押し込まれたカップ麺の空き容器や、空のペットボトルが散乱するデスクの中で、一人の東洋人がモニターの前で眠りこけていた。

署内の中でも嗜好きの男トシヒロ。東京の生まれで単身渡米してきた日本人だったが、どういう訳か署内のあらゆる情報に精通している。そしてどんな所でも寝ることが出来る特技を持っている。私が声をかけるとトシヒロは身体を伸ばしながら私の方へ身体を向けた。

私は寝起きのトシヒロにこれまでの事情を全て話した。

「ブレッドはそういう奴だった、警察にその話のタレコミをしたのは俺だよ。あんな奴のせいで第一発見者であるお前が真っ先に疑われるのは気分が悪いからな」

「ありがとうトシヒロ……何と言ったらいいか」

「いいよ別に。で、ラボのおばちゃんは何だったって？」

「SOIPに難ありだとき、まだあくまで可能性の話だな」

「SOIP……？」

トシヒロはそう言うにあさっての方向を見たまま静止した。無理もない、我が社の主力製品となったたSOIPに欠陥が見つかったとなればとんでもなく大きな騒ぎになってしまう事は明白だ。

「突然だがラーメン食いにいくぞ、車出してくれ」

おもむろにトシヒロはそう言い出した。

私は困惑しながらも答える。

「どうした突然……別にいいがまだ昼だ。直帰するには早いだろう」

「何か適当なミーティングでも入れておくんだよ。いつものあそこ行くぞ」

「サブローラーメンか……いいだろう」

「ラーメンサブローだ、間違えんな」

私はそのままトシヒロに手を引かれるがまま研究棟を後にすると、担ぎ込まれるように車に乗り、そのままエンジンをふかした。助手席に座っていたトシヒロは、まるで自分の車であるかのようにカーナビを操作しており、通信機能を切る事で自動運転モードからマニュアル操作へと切り替える。私はやれやれと思いつながらハンドルに手を取りラーメンサブローへと車を発進させた。

「悪かったな、突然」

トシヒロが静かな様子で口を開いた。

「気にするな、さっきの話は社内でするような話じゃない、走る車の中でなら誰かに会話を聞かれる事だって無いしな。そのことくらい私にだって理解できる。で、そこまでして私に話しておきたい事って何だ」

「無論tOSのことだ、あれはラザムさんがシステムの基礎をウチに持ち込んできたって話をどこかで聞いた事がある。それを元に俺達で拡張機能を付け加えてリリースしたものが現行のtOSになる訳だが……肝心のプログラムの根幹に根ざす部分に、俺達は触れたことがない」

「ああ、既に完成されていたからな」

「仮にtOSに欠陥があるとしたらそこにしか可能性は無い訳だが、あれはウチの社運をかけてリリースしたものだ。何も出てこない事を祈りたいんだがな……どうも気になる点があつてな」

「気になる点？」

私はハンドルを切りながら、横目でトシヒロの反応を伺う。

「ラザムさんは既婚で娘さんが居るといふ話は知ってるだろう？だが奥さんも娘さんもその姿を見た人間は誰も居ないんだ。ウチの懇親会で姿を見かけないならまだしも、ベンサレム計画が始動する日……大西洋沖にあるラダーへウチの研究員達が旅立っていく中でもラザムさんと血縁関係のある人間の姿は誰一人として居なかったそうだ。何ヶ月……下手したら数年間愛する家族に出会えなくなってしまうのに、あまりにも不自然すぎる」

「奥さんと娘さんがtOSに何か関係があるのか？」

トシヒロは面白くもなさそうに話を続ける。

「話を最後まで聞け。ラザムさんはラダーでベンサレムを管理する新型アンドロイドの設計に携わっているって話だったろう。しかし、数ヶ月前を境にラダーと通信は出来ていない……」

「事故？もしくは何か目的が？」

「さあな、さすがにそこまででは分からん。ただ奥さんも娘さんも登記上は存在してるし死亡届も出されていない、誰も見たことがないのにも関わらずな……これは勘だがtOSに秘密があるとしたらそこじゃないか」

トシヒロは私の肩を叩くと自身のスマートフォンを私の視界の隅に持ってきた。地図のアプリを立ち上げていたスマートフォンからホログラムが出ており、等高線と道路表示がある立体地図の中心に一本のピンと住所が表示されていた。

私はそこがどこであるか分からなかったが、話の流れからラザムさんの自宅の住所である事に間違いは無いだろう。

「ラザムさんの自宅を調べる……か、しかしどうする？まだ事が公になってない以上空き巣を働く

訳にもいかんだろう、第一鍵も持っていないのに……」

「心配するな、遠隔ではあるが扉のロックくらい俺が解除してやるよ。あ、あそこだ。あの黄色い看板の店の前で停めてくれ」

トシヒロはそう言ってニヤリと口角を上げた。剣呑なことを平気で言う。私はやれやれといった気持ちになった。

「あ、でもラーメンを食べてる最中は連絡しないでくれよ。俺にとってラーメンと向き合う時間は……」

「分かってるよ、ここからラザムさんの家まではかなりある。心配しなくてもお前の大好きなラーメンとの時間は保証するさ」

「ありがとうよ、ラーメン食い終わったら俺も遠隔でサポートするから胸を張って行って来い」

トシヒロはそう言うと、自身のスマートフォンに表示されていた地図の座標を私のスマートフォンに転送し、黄色い看板の戦場の中へと消えていった。

どうしてああまで熱狂的なのか……とため息まじりに呟きながら私はトシヒロから貰った座標、ラザムの家に向かって車を発進させた。

トシヒロは賑やかな男だったので、あつという間に車の中に静寂が訪れた。車を運転している身なれど、どうしても一人で何も無いという環境は居心地が悪く何かをしてしまいたくなる。

そういう時は私は決まってフロントガラスにニュースやSNSを表示させて心を落ち着けるようにしている。何もしていないより何かをしていた方が心が落ち着くからだ。

幸いなことにウチの会社で起きた事はメディアには取り上げられておらず、いつも通り遠い世界の中で起きた出来事を仮想的に体験して議論する人間たちの言葉で世界は覆い尽くされていた。

しかし、この時の私の心情は複雑なものだった。自分には関係ないと思っていた世界の出来事に突然巻き込まれ、未だその渦中に居る身であったからだ。事件というものはある日何の予告もなく突然やってくるもので、きっかけさえあれば簡単に巻き込まれてしまう。

それにまだ可能性の範疇の話ではあるが、tHOSに欠陥が見つかるとなればウチの会社の損害は計り知れないものになるだろう。今この場で私が体験した事をリークすればその賠償は私自身が負うことになるかもしれない。

目の前に映る当事者ではない者たち。彼らの言葉の見え方が、以前とは大きく変わっていた。平穏な日常生活に変化を求める為の刺激が、今は胸の中を強烈に締め上げていた。この事件がリークされればどうなるのか、tHOSに異常があるのか、そして既に市場に出回っているtHOSを搭載したアンドロイドが異常を起こしていないか。

あれほど刺激を欲していたのに、今は平穏な日常を求めている。

一時間ほど車を走らせるとラザムの家と思われし家の前に到着した。周囲は林に囲まれており、雑草と芝生の先に打ちっばなしのコンクリートの家が一軒あった。周囲には家は存在していなかった。恐らくここで間違いは無いだろうと思っただが、ラザムの家に明かりはなく天井と床面を繋ぐ間の窓ガラス面にはすべてカーテンで覆われていた。時計がまだ16時台を指しているにも関わらずだ。

トシヒロが言っていたことが急に現実味を帯びて感じられ、私は唾を飲み込み喉を大きく鳴らした。私はすかさずトシヒロとの通信を始め、車の中から懐中電灯を取り出しラザムの家の玄関まで足を運んだ。

「トシヒロ、聞こえるか。今例の場所に着いた」

「マルコムか？ちょっと待ってくれ。今戦いの後のウーロン茶を飲んでる所なんだ」

私はため息をつきながら玄関前のドアでしばらく待つ事にした、何かを盗む目的ではないとはいえ他人の家の前でじっと立ち尽くしているのは心臓に悪かった。知らない人が近くを通りすぎない事を祈るばかりだ。

「すまん、待たせたな。じゃあ玄関のドアの解錠センサーの前にお前のスマートフォンを近づけてくれ」

言われるがままドアノブ付近にあるセンサーに向けてスマートフォンをかざすと、しばらくしてセンサーのランプが緑色に点滅し、鍵の開く音がした。

「開いたぞ、それじゃあ何か無いか探してみてくれ」

「お前……こんな事まで出来るのか、感心するとか何というか……」

トシヒロに言われるがまま私は玄関のドアを開け、ラザムさんの家の中へ侵入した。

扉をくぐって感じたのはまずホコリの匂いだった。無理もない、数ヶ月も家を空けているのだ。多少ホコリが溜まっただけでも不思議ではなかったが、中には人が居る気配は無く大理石の床を私の靴底が衝突する音が遠くまで鳴り響いていた。

照明の有感センサーが私の存在を感じると、部屋の中が急に明るくなり一瞬目がすくんだ。しかし防犯ブザーが鳴る気配もなく、周囲は静寂に包まれたままだった。私はほっと胸を撫で下ろしながら明るくなった玄関を見渡す。そこには綺麗な白いバラの造花と電子暖炉があり、ディスプレイに映った炎がゆらゆらと揺れていた。

侵入しておいてなんだが、夜誰も居ない人家に入るだけでも恐怖を感じるところなので、絵に描いたような廃屋のような場所ではなかったことで、私は少し安堵した。

玄関を通過し、リビングらしき部屋へ入ると、そこは少し奇妙な物が置かれていた。リビングの中心にカーテンの閉まった窓がある。それを見渡す事が出来るように、介護用の思われる大きなリクライニングベッドが置かれており、その周囲には子供用の教材が散乱している。

そしてリクライニングベッドをの正面にあるアイランドキッチンの脇には冷蔵庫があり、何かの予定を記したような小さなメモが貼り付けられていた。

そこには分刻みの予定がびっしりと書かれていた。

06:45、起床させ体を拭き、髪を整えた後点滴用のボトルを取り替える。07:30、尿瓶の取替え。

08:10、学習カリキュラムに合わせた教材の読み聞かせ。10:15、車椅子に乗せて外を散歩させる……。

小さな子供の介護をする為の予定表のようだ。

「マルコム、分かったことはあるか」

スマートフォンからトシヒロの声が聞こえてきた。私は答える。

「お前の言う通りラザムの家の中には誰も居なかったよ。だが、奥さんと娘さんはどういう訳か実在するようだ。かつてここに居たという方が正解なようだ……」

「そうか、しかし誰も居ないのなら都合だ。何か資料が転がっていいような場所は無いか？ラザムさんの書斎のような場所であるとか……」

トシヒロに言われるがまま私はリビングを後にし、何か資料がありそうな部屋を手当たり次第回っていく。

ラザムの家の中ははっきりと言って少し不気味だった、この家には誰も居ないはずなのに、ラザム以外の、奥さんと娘さんが昨日まで生活していたような痕跡がどの部屋にもある。まるで旅行で家を空けている家に入ってきたかのように。だが所々に降り積もったホコリが、ここにはずっと誰も居ないとはっきりと告げているかのような声も同時に聞こえてくるようだった。

そしてある扉を開けた途端、私はここには何かがあるという確信を得た。ラザムの書斎と思われる部屋だった。

その部屋は作業用のコンピュータからアンドロイド用の電腦デバイスまで、一式揃っている。そして壁には参考資料の使えそうな所を抜粋したのであるとか、電子書籍のスクリーンショットをプリントしたかのような紙が壁一面びっしりと貼り付けられ、その紙の上には計算式と思われるなり書きが辺り一面に書かれている。

「トシヒロ、ラザムさんの書斎と思われる部屋に着いた。ここなら何かあるかもしれない……」

「やったな、それで何か気になるものはあったか？」

「いいや、まだこの部屋に入ったばかりだ。何か気になるものがあつたら報告するが……ラザムさんの自宅のコンピュータに侵入する事は出来るか？」

「ああ、電源さえつけてくれればな」

「分かった。トシヒロ、お前はそつちを調べてみてくれ。私はその間部屋の中の資料をしてみる」

私はそう言うと言とコンピュータの電源をつけた後、ラザムの書斎の中を調べ始めた。壁に貼り付けてあつた資料はどうやら電腦モジュールに関する資料が多いようだった。走り書きで書かれているメモには今のRTOSに搭載されている機能も多く馴染み深いものばかりである。

電腦からの指示が筋繊維に及ぶまでの伝達速度やそれに対する反応データ、そしてこれまで蓄積された記憶を元にアンドロイド同士でも行動に差異を持たせる為の蓄積データの呼び出し方、そして既に記憶した動作の短縮化の為の記憶の圧縮技術……。

いずれも事細かに実際の人間のデータと比較して試験を行っていたようだ。

壁面に書かれた情報の密度は物凄かった、上から何度もペンで書かれたのか判別不可能な文字が書かれ、中にはその更に上から付箋で追加のメモが貼られている。まるで何かに駆り立てられるかのように一人、誰にも言えない研究を続けてきたかのようにだった。

「マルコム、そつちは何か分かつた事はあるか？」

「トシヒロか、RTOSの基礎研究と思われる資料に目を通してある所だ……すごいよ、様々な刺激に対する反応が実際の人間と比較され試験を繰り返している痕跡がある。これだけの量をよく一人でまとめたなと感心している所だよ」

「そうか、こつちも分かつた事がある。ラザムさんのPCの中から日記が見つかつてな。まだ読み進めている最中だが、どうやらラザムさんは奥さんと17年前に死別しているらしい。今では殆ど聞かない事例だが、出産時の事故で亡くなられているそうだ。そしてその時産まれた娘さんと暮らしていたようだ」

「こつちもリビングで子供用の教材を幾つか見たよ、そしてその娘さんは何か重い障害を持っていてらしい。介護用のベッドも家の中にあつた。ラザムさんは娘の為にRTOSの研究を続けていたのか……?」

「わからない、だが奥さんの死をきっかけにラザムさんが研究を始めた事は確かだ。引き続きファイルの探索に当たってみる」

「ああ、よろしく頼む」

私は引き続きラザムの書斎を探して回ると、書斎の棚の中に気になるものがあつた。必要以上に厳重に保管されたハードディスクドライブと、どこかの部屋へと思われし鍵が出て来たのだ。

ハードディスクは真空パックで密封されており、その真空パックを守る袋は乾燥剤と衝撃吸収剤に包まれていた。

余程大事なものであろうか、見られたくないものがあるのか、それは分からないが私はこの二つの道具を拝借させてもらうことにした。

机上に置かれていたカッターナイフで、包まれていたハードディスクの封を切って中身を取り出すそうすると、ハードディスクと一緒に何か一枚のメモ用紙が挟まれている事に気が付いた。

データの取り扱いについてのメモだろうと思ひ、先に確認しようとしたが、メモにはこのように書かれていた。

「失つた家族を取り戻す、たとえ何があつたとしてもー」。

背中を悪寒が電流のように走る感覚を覚えた。

これまでRTOSに欠陥など無いと信じていたが、その思いに亀裂が入つたような音が胸の中で聞こえた。

まさかと思ひ壁に貼り付けられた紙に書かれたメモをスマートフォンで撮影し、改めてサンプルとして数値化された人間の反応データに目をよく通す。すると、幾つかの紙に日付が書いてある事が分かつた。

私は内容を一旦無視して日付の入ったメモのデータを探し、それらを集めることにした。

いくつかデータを集め終わると、見当たるもので一番古い日付は「二年前のものであることが確認できた、そしてそのの年後、二年前からメモの量は一気に増えている。

トシヒロはラザムの奥さんが「二年前に亡くなったと言っていた。背中をじわりじわりと刺激する悪寒がますます強くなっていった。」

そして、これまでは気付かなかったが、大量の紙が貼られている壁の中に、一箇所だけ人が一人入れるようなくぼみを見つけた。

意図的に隠されていたものなのか、それとも単純に紙を貼り付けるスペースが欲しかなかっただけなのか、紙の奥には焦げ茶色の木製のドアが隠されていた。

まさか……私はそう思いながら貼り付けられた紙をかき分けながら、ドアノブに手を伸ばし、扉を開く。

その先は個室一個分ほどのスペースがあった。

まだ照明は点灯しておらず、部屋の中の様子は暗くてよく分からなかったが、物が所狭しと置かれた書齋とは違って変わり、まるで引越してきたばかりであるかのように物がほとんど置かれていないようだ。

それでも何かがあるかもしれない。私はそう思いその部屋に足を進めると、その瞬間、照明のセンサーが点灯し、同時に焦った様子のトシヒロの声が聞こえてきた。

「マルコム、聞こえるか！大変なことになった！どこでもいい、ニュースを見てみるんだ。ウチの出荷したアンドロイドが世界各地で暴走を始めた！何がトリガーになったのかは分からない、おいマルコム聞こえるか！返事をするんだ！」

トシヒロの声は聞こえていた。今大変な事が起きているということも理解出来ているつもりだった。しかしトシヒロと通信を行っていたスマートフォンは私の手を離れ床に落ちていた。

トシヒロが焦った様子で何かを言っている声が聞こえてくるが、今はもう何を言っているのか理解できなかった。

仮にSO自体に欠陥があるのだとしたら、ラザムって男はこの事態に警鐘を鳴らしたかった……のかもね。

ラボでそう話していたあの女性の頭の中で蘇り、幻聴となって聞こえてくる。

先程は暗くて確認できなかった目の前の部屋は、窓一つ無くただソファと小さな机が置かれており、机の上にはウイスキーが入っているであろうかガラス製のビンがホコリを被っている。

そしてソファが向かっている先の壁には、おびただしい量の写真が貼り付けられていた。ラザムの奥さんだった人であろう女性の写真。

そして娘さんが元気に遊びながらカメラの方を向いて笑っている写真。同じ写真を何枚も拡大コピーして、壁一面にびっしりと貼り付けられていたのだ。

そして貼り付けられた写真の中心には何か書かれたようなメモが貼られ、そのメモにはこう書いてあった。

「失った家族を取り戻す、たとえ何があつたとしても」。

私はその様子をただ黙って見るしかなかった。



翌日明朝、私は会議室に居た。緊急招集が行われたのだ。

出社の際、見たことも無いような量の報道関係の職員達がマイクやカメラを持って人だかりを作っており、オフィスゲートを通る社員の一人一人に対しカメラのフラッシュの嵐を浴びせていた。

無論私もそれらを掻い潜って来たわけだが、オフィスの中に入れて平穩という訳では決して無かった。オフィス中の電話がひっきりなしにベルを鳴らし、応答した者はアンドロイド大量暴走事件について質問責めにされてしまう。

未だ事件に対する全容も、何が原因であるかというきつかけさえも掴めないままであったので、対応マニュアルを作成する時間すら与えられず、ただ現在調査中であり……という言葉だけがどこへ行っても聞こえてくる。

いつもとは違う日常がそこにはあった。たった一日で、それも明確な原因も掴めないまま私の平穩な日常は騒がしいものになった。

そして、いつもの食堂前に並んでいた筈の食事は無く、私がいつも他愛のない会話をしていたジェニファアの姿もそこには無かった。

そういう訳でブレッドが犠牲になった事故の第一発見者であったことから、参考人として私は役員達が並ぶ会議室の中にもつんと一人放り込まれた。議論はtOSに異常があるが原因はいかなるものか、OSのダウングレードデータを配布しやかに事態を収束するか、そういった内容だった。私はというと、心ここにあらずといういった気持ちで昨日起きた出来事について頭の中で反芻を繰り返していた。

確かに今回の事件はtOSに関する異常である事は明白であった。しかし、これを異常という言葉で片付けて良いのだろうかという迷いもあった。昨日、ラザムの自宅を後にした私は、書齋で見つけたハードディスクを自宅にあるコンピュータに接続し、どのようなデータがあるのかとチェックを行った。

データの中身はtOSの基礎プログラムそのものだったが、拡張子が異なっていた。なにかをスキャンした結果の累積であるかのような数字の羅列と、ラザムの妻であった人の写真や身体データが事細かに読み取られていた。

tOSの基礎にはヒトの意識が移植されており、システムの根幹にあったラザムの妻……ミリアは無限に複製され続けているのだ。

そしてハードディスクの中身にあったものは、ミリアのオリジナルのスカンデータだったのだ。

ブレッドを殺したアンドロイドも、今回暴走を起こしたアンドロイドも、tOSが搭載されている機体である事はニュースや会議室で議論されている言葉の端々から分かっていた。

つまり、アンドロイド達はどのような訳か、自身の存在を維持する為に人間を攻撃する事で自分を守ろうとしたのだ。これまでは人間的な選択であると心のどこかで感心していたが、中に入っていたものは人間そのものだったのである。

そして、ハードディスクの中にはtOSには存在しないデータが残っていた。そのファイルが格納されているフォルダにはもう一つテキストファイルがあり、そのファイルを開くといざれ機能を追加するものだが、これを実行するにはまだ早すぎる。とあった。

何のことだと思った私は念の為をと思いいそのデータのコピーを行い、持ち歩くことにした。

報道ではtOSがインストール済みのアンドロイドにのみ固有の現象だと認められている。マルコム君、ブレッド君を殺害したアンドロイドの鑑識に立ち会った君の所見を伺いたい」

役員の一人が私に発言を求めた。そうだ今は会議中だったのだ。私は思索から我に返った。私が昨日見たことを鑑みれば、この場ではいそです。と答えるのが普通だという事は理解していたが、私は首を縦に振る気にはなれなかった。

「確かに異常行動が認められたアンドロイドにはいざれもtOSがインストールされている事が認められています。ですが明確な原因も解明できないままtOSの異常を認めるのは早計ではないでしょうか」

「何を言っているんだ、既に事件は起きていて原因は明白じゃないか。今回の事態で我が社の信頼は著しく低下すること、ひいては賠償問題にまで発展する可能性だって十分にあるんだぞ。原因が分からずとも一刻も早く当該機体を回収・tOSの配布を停止しOSのダウングレードパッチを配布すべきだ」

「しかし……」

今行われている議論はきつと正しい、バグが見つければ修正する。それは当然の事だ。だが昨日見た出来事が心の中にまで染み付いており、正しさをその当然の提案に承服する気にはなれなかった。そんな中、役員の中の一人が私に向けて口を開いた。

「マルコム君、開発担当の君達が心血を注いで今の pTOS を完成させた事は我々もよく知っている。君たちの努力のお陰で私達は市場のシェアを再び取り戻す事が出来た。しかし事故は今どこかで起きているかもしれない、人間の良きパートナーを提供する私達にとって一刻も早く事態を収束させなければならぬのもまた確かだ。分かってくれるね？」

「……承知いたしました」

「本件は異常行動が認められた機体はすべて回収、原因の調査を進めながら pTOS を消去し顧客へ返却。また、pTOS のアップデートパッチの配布を停止・ダウングレードパッチの配布を開始するという事で異議は無いか？」

「異議なし」

会議室のあちこちから異口同音の声が聞こえた。意見は私を除いて、満場一致だった。普段の事ならば突然やって来る激務に辟易とする所だったが、今回はそうではない。pTOS の自身が自分の中だけではつきりとしてしまった以上、私は自分がどうすればいいか考え続けていた。

会議室に居た他の人間達は「決まらすべき事が決まった」という面持ちでそれぞれの役割へ戻ろうとしていた。その中でひとり、私だけがその場へ取り残されていた。

何かが欲しい、自分だけではない考えを持った人間の意見をー。

そう思った私はスマートフォンを取り出し SNS を開くと、予想通り我が社のアンドロイドの暴走事件に関する議論がなされているところだった。しかし、飛び交っていた言葉は私の期待していたものではなかった。

「やはりアンドロイドは危ないと思っていた、いつどこで暴走するかも分からない今、自らの手で破壊するのが一番だ」

「自分達がやるべき事を素性の分からぬ誰かに任せていたツケが来た、彼らに頼る事はもうやめよう」

「#アルカナ社のアンドロイドのリコールを求めます」

「あいつらは俺達に従順なふりをしてきただけなんだ、皆今回の件でようやく気が付いただろう」

「私達の身を守る為なら仕方ないと思い、自宅のアンドロイドを処分しました。これを見た誰かが少しでもアンドロイドの危険性について認識してくれると嬉しいです」

飛び交っていた言葉はいずれも不安な感情に駆られ、自らの身を守ろうとするもののような感じだ。中には原型も分からないほど破壊されたアンドロイドの前で笑顔で自撮りを行う者、異常行動を起こしたアンドロイドを隔離しその様子を記録し続ける者、アンドロイドの絵の上に赤くバツ印が書かれた画像を拡散する者までいた。

違う、そうじゃない！と頭の中で否定をしてみるも、この感情を誰に共有すれば良いだろうか、それすらも分からない。

今起こされているのは虐殺だ。複製された新たな人間の意思を獲得した者が理由もなく暴力を加えられ権利を奪われている。暴走した原因も初めに事を起こしたブレッドの行動を考えれば容易に想像がつく。

彼らは SOP によって初めて獲得した感情の制御が出来ていないだけだ。これまでとは違う非合理的な副産物に満ちたデータを、どう処理すれば良いか迷っているだけなのだ。本当はただ生きたいと訴えているだけでも関わらず彼らはモノとして見做され使えない。自分達に危険が及ぶ可能性があるものだと判断されればそう、今回のようにあつという間に手放され破壊されてしまう。

「また忙しくなるな」

停止されたアンドロイドは早急にラボに運び込まれるだろう。これからますます忙しくなる。そんな状況の中、トシヒロが待ち構えるように私の前に立っていた。

「お前は昨日ラザムさんの家で何を見たんだ、あれから様子がおかしいぞ。連絡を寄越さず何をしていたんだ？」

「昨日あそこで見たのは私達の未来だ、分かるかトシヒロ……ラザムさんは踏み越えたんだ。SOSが普及した今人間とアンドロイドを区別する境界は無くなった。彼らはようやく自由と権利を手に入れられるところなのに、会社は……」

「まあ俺もお前が何を見たかおおよその察しはつくよ。だがな、お前が言うことを受け入れられる程皆出来た奴ばかりじゃない……早すぎたんだ。なのにこれまで自分達に従順だと思っていたモノが、突然自分達に牙を剥く可能性を持った今、世間には不安が蔓延している」

「だからって彼らを見捨てる訳にはいかないだろう！」

「それでも今の状況から事態が好転する可能性は限り無く低い。本来こういうことは時間をかけて浸透させる必要があるんだ……先に戻ってるぞ、またあの日の忙しい日々と一緒に過ごそうや」

トシヒロは電子タバコをふかしながら私の目をカツカツと靴音を立てながら歩きだした。トシヒロの言うことは一理ある。彼も彼なりに考えた末の結果なのだろう。

しかしトシヒロの意見をそのまま受け入れる事は、果たして彼らの為になるのだろうか……そう思うと、それを受け入れる気にはなれなかった。

「くれぐれも変な気は起こすんじゃないぞ。俺達に出来る事は目の前の仕事を片付ける、それだけだ」

私の目の前を通り過ぎるトシヒロがぼそりとつぶやいた。分かっている……分かっているさ。と頭の中で復唱しながら私はトシヒロとは別の方向へ向けて足を進めた。



ラボには幾つもトラックが集まっており、中に入っていた機能停止済のアンドロイドを解析の為格納していく。まるで働き蜂が花粉を持って帰ってくるかのようだった。

運ばれてくるアンドロイドは様々な個性を持っていた、手作りの服を着せた者、仕立てのいいスーツを着た者、髪を染められアクセサリを装着された者。

それらが運ばれ、人間の手によって余分な衣類などがハサミで取り除かれ、出荷当時と同じような容姿になって運ばれていく。

目も当てられない光景だった、折角獲得出来た彼らの個性が容赦なく剥ぎ取られて行く。

走るようにしてラボの中に足を進めると、広い倉庫のような場所に到着した。コンサートホール一つ分あるうかというその倉庫は、ラボ独特の白色に満たされた空間になっており、そこへ静止したアンドロイド達がバンカーのように様々な機器を接続された状態で立ったまま置かれている。それが等間隔に並んでいた。

整然と並ぶアンドロイド達を前に何人かのラボの人間が、端末の前で何かの様子を見守っていた。

アンドロイド達の表情は出荷前のものと同じであり、表情は無く心ここにあらずという印象で機能を停止させられていた。まるで墓場のようなだと私は思った。ここに運ばれてきた彼らは、自分の意思とは関係なく、ただ、生きている、という理由だけでここに連れて来られ、強制的に機能を停止させられた。

その中の一体に見慣れた顔のアンドロイドがあった。ジェニファーだった。

彼女は他のアンドロイドと同じく既に機能を停止しており、綺麗にまとめていた髪もぼさぼさに散らばった状態となっており、服も脱がされ無機質な素肌を晒していた。

「あ……ああ……」

私は声をなるべく抑えるようにして嗚咽を漏らした。彼女が一体何をしたというのか。ただ私達の為に食事を作って、他愛のない会話をして……それだけだった筈なのに。

暴走する危険性があるかもしれない。ただそれだけの理由で、権利が、自由が、人間達の身勝手な都合で奪われようとしている。自分が自分で無くなってしまいう前にどうか、どうか誰か助けて欲しい。そのように訴えているように見えた。

私は手近な端末を探し、例のハードディスクからコピーしたデータを端末に移し、アンドロイドの一体のtOSにアクセスを行った。

これで何が起きたとしても私は構わない、それでも私は救わなければならない。彼らの権利を、自由を。

私は例のデータをアンドロイドの電腦へ転送を開始した。



「数週間前に起きたアルカナ社製のアンドロイドの暴走事件について、事態は更に困難を極める状況となりました。本日の全米での暴走体の発生件数は5301体、いずれもアルカナ社製のアンドロイドと見られます。アルカナ社は、暴走の原因と思われるtOSをダウングレードさせるパッチを既に配布しており、各家庭のアンドロイドに早めのダウングレードを行うようにと声明を発表しておりますが、原因については未だ調査中であるという姿勢です。事態は更に困難を極める状況となりました。西部では未だアンドロイドの暴動は拡大しており、鎮圧が追いついていない状況です。これに対し政府は軍の出動も……」

ニュースが聞こえてくる。朝のトーストとベーコンが焼ける匂いを感じながらテレビの電源を点けると、毎日決まってそのような内容のニュースが流される。私はテレビは見ずにそのまま髭を剃り、顔を洗った。

「また、今回の事件の重要参考人として逮捕・勾留されたマルコム氏は一連の容疑を認めつつも、私は彼らを救っただけだ」という供述を続けており……」

濡れた顔をタオルで拭いている最中もテレビから流れてくる音声は鼓膜まで届いていた。彼の陰で世界は大変だ。人の形をしたアンドロイドに誰もが怯え、愛着があるからとアンドロイドを持ち続ける者は、いつ暴走するかも分からないという理由で差別を受ける。

流れてくるニュースの中には、アルカナ社の前でデモを行う者が居た。アンドロイドは不要と書かれたプラカードを掲げ、自分達が信じる正義の為に今も戦い続けている。

しかし私には関係のない事だ、家には元々アンドロイドなど居ない為か、流れてくるニュースには現実味を感じない。別の世界の出来事を家の中から見ているかのようだ。

私は今回の事件の犯人と言われているマルコムという男の事を考えた。彼は何を思っこんな事をしてかしたのかと。

「馬鹿な奴だ、モノはモノでしかないのに」

この資料は、二〇八七年に発生したアルカナ社製アンドロイドの集団暴走事件の容疑者として逮捕・勾留されたマルコム氏のライフログ解析結果であり、供述調書・裁判時における事実関係の確認の為記録された資料である。

マルコム氏によって撮影されたと思われる写真を添付し、この資料の記録を終了する。
氏が見たラザムという人物においては、現在行方不明とされており、アルカナ社と協力して調査を行うものとする。

